

「胸部外科」特集原稿募集

2022年1月号（75巻1号）において標記のテーマの特集を行いますので奮ってご応募ください。

テーマ

日本の心臓移植の今

1997年に臓器移植法が制定され、法律のもとに心臓移植がはじめて実施されたのは1999年2月であった。2010年7月に改正臓器移植法が施行されてからは、家族同意による脳死臓器提供が可能となり、それまで年間10例以下であった心臓移植は徐々に増え始め、2019年には84例まで増加した。2020年12月までに560例以上の心臓移植が実施され、国内で移植した後20年以上経過した症例も現れ始めた。わが国は心臓移植後発国であったために、当初は長期予後について不安視されていたが、10年生存率は85%を超え、欧米を凌駕するほどの優れた成績となった。小児心臓移植は2010年の法律改正後に事実上ようやく可能となったのであるが、その後着実に増え、年間移植数の10%以上が小児心臓移植となる時代に入り、通算でも50例を超えている。

しかしながら、依然として多くの課題が残されている。新規心臓移植登録数が年間移植数よりもはるかに多いために、移植待機期間は年々延長し続けており、成人においてはすでに4～5年を超えつつある。95%以上が植込み型補助人工心臓を装着して移植待機をするという、世界的にみて特異な状況を生み出している。小児の移植待機期間も1～2年を超えようとしており、欧米の標準からみると著しく長いといわざるをえない。長期の待機がむずかしい、つまり補助人工心臓装着がむずかしい病態の場合にどのように待機するのが最適かについては、いまだに結論が得られていない。

臓器移植法が制定されてはや25年に差しかかろうとしている今、わが国の心臓移植の現状はどうであろうか。多くの施設や移植にかかわる方々からぜひとも報告をいただきたい。

『胸部外科』編集主幹 近藤 丘, 小野 稔

*

*

*

- **内 容**：臨床と研究、臨床経験などテーマに沿ったもの
- **応募方法**：予定タイトル、著者名、施設名、ミニ抄録を400字詰原稿用紙1枚に収めて**2021年5月31日（月）**までにお送りください（E-mailでも構いません）。
編集委員会で採否を決めさせていただき、2021年6月末日までにご連絡いたします。
なお採用論文は下記のとおりご執筆をお願いいたします。
- **原稿枚数**：400字詰原稿用紙12枚以内（英文summaryを含む）、図表6枚以内
- **原稿締切日**：2021年8月31日（火）
- **掲 載 号**：『胸部外科』75巻1号（2022年1月号）

宛先：☎ 113-8410 東京都文京区本郷三丁目42-6 （株）南江堂『胸部外科』編集室
TEL：03-3811-7619 / FAX：03-3811-8660 / E-mail：pub-jt@nankodo.co.jp